問題　以下の文章を読んで，経済的効率についての著者の考えを400字以内でまとめ，解答欄(1)に記述しなさい。また，著者の見解に対するあなた自身の考えを1400字以内で，解答欄(2)に記述しなさい。

効率は経済成長を生み出す。たとえ，その経済成長が，望ましい形で均等に拡がるわけではないにしても，とにかく経済成長をもたらす。しかし，成長によって生み出された余剰のカネがいったい何に費やされるのかを考えるべきだ。3パーセントの経済成長率が100年にわたって続くとしたら，それは現在より16倍もの消費を行うことを意味する。もし，人口がそのままで一定しているか，減少したら(その可能性がきわめて大きいが)，その結果は信じがたいことになる。すべての人が車，テレビ，旅行，飲食，石油，ガスなどの消費を16倍にすることがありうるだろうか。あらゆる種類の新製品やサービスが生まれることは疑いの余地がない。だが，その内容はどんどん「珍道具」となる傾向をもつだろう。

おそらく読者は「珍道具とは何だ」と思われるだろう。珍道具とは，買う気はそそられるが役に立たないもろもろのものを意味する日本語だ。たとえば，雨天に外出するための眼鏡用ワイパー，下にモップがついていて家のなかを歩き廻りながらついでに床を拭くことができるスリッパ，などだ。私も決して着けることのないネクタイをたくさんもっているが，これも珍道具の一種だ。立派な包装紙に包まれたこうしたものをクリスマスのたびにもらうことになるし，さらに意匠を凝らした珍道具のカタログが，各家庭の郵便受けに配達される。2月14日のバレンタインデーともなれば，米国人は実に3千万個ものハート型チョコレートを買うらしい。

風変わりなものが珍道具になることもある。私の友人がブラジルのある知人を訪ねたとき，そのブラジル人が自宅に6台もの冷蔵庫をもっているのに，そのうち5台はコンセントにさし込んでいないのを見つけた。「どうしてだ」と彼は尋ねた。そのブラジル人は答えた。「そう，インフレがひどいので，カネをもっていても，ひなたに置いた牛乳が腐るようにあっという間に駄目になってしまうので，現金を手にしたらすぐに，買い物に出かけて使ってしまうのさ」。彼は冷蔵庫しか欲しいものが見つけられなかったのだ。これぞ“珍道具冷蔵庫”である。これが「高揚する消費者の需要」と言われるものが真に意味するものなのだろうか。こんなことのためにこれほど懸命に働いているのだろうか。

科学技術も珍道具を基に繁栄する。今では洗濯機で12の異なった洗濯モードが選べるが，その大半はまったく使われない。私がもっているビデオデッキは1カ月以上先の録画の予約ができるが，実際に試してみる必要を感じたことなどない。私は一番たくさんの機能がついているからという理由で，そのビデオデッキを買ってしまった。つまり私も，かの珍道具病の餌食となり，役に立たない機能がついていることに惑わされてしまったのだ。私の息子がもつ新しいコンピューターは，2年前に私が買った当時の最新機種では考えられなかったような性能を備えている。そうした機能は私にとって必要ないとわかっていながらも，息子と同じものが欲しいという気持ちはなかなか抑えられない。

言いたくはないが，多くの書物も珍道具だ。英国だけでも，1996年に，10万6千冊の新刊書が刊行された。おそらくそれぞれ，出版社をまずまず喜ばせる程度の部数は売ったのだろうが，その多くがほとんど読まれないのは確実で，ただ本棚に積んでおかれるだけだ。書物というよりは，木材を無駄使いした紙の束だ。読まれもしない書物やほかのあらゆる珍道具に対処するため，どの社会も使い捨て経済とならざるをえなくなっている。さもなければ，文字どおりまったく足の踏み場もなくなってしまう。ゴミ収集とリサイクルが人気産業となり，激安ショップは繁盛する一方だ。郵便は，ますます多くのカタログや無料の試供品を運搬している。珍道具世界も大忙しというわけだ。

珍道具社会は，経済的繁栄という観点からは高得点を取ることができても，労働や生きることに十分な理由を提供するといえないのは明らかだ。もし，「高揚する消費者の需要」が，がらくたで一杯の世界を意味するのであれば，なぜ，そうした世界のために私たちが，かくも懸命に働かなければならないのか理解しがたい。アダム・スミスも次のように述べている。「国を愛する人や情を具えた人ならだれでも経済成長に反対はできないだろう。だが，成長はいったんタガが外れるとたちまち，世界中のあらゆる無用な品物の際限のない自己増殖と化してしまう」。彼は，「教養」を社会の目的にすることに賛成だったが，残念ながら，それを効率に結びつける道筋を示すことはしなかった。

英国の経済学者フレッド・ハーシュの見解によると，経済成長は究極的には自己を限定していくものだ。なぜなら経済成長は，自分と隣人との間に次第に一線を画

させるような「区別化商品」から生じることになるからだ。つまり，見晴らしのよい別荘，排他的なクラブの会員権，珍品骨董といったものだ。こうした商品は定義上からも数量が限られている。だれもがそうしたものをもてば，その排他的価値を失ってしまうからだ。ハーシュは，私たちが新しい流行や新しい行きつけの場所を考え出す能力を過小評価していたかもしれない。だがやはり，隣人への羨望を主な原動力としているような社会は，そのために奮闘する値打ちがあるものでもなければ，多くの人々がそこに住みたいと願うようなものでもない。というのは，嫉妬にみちた比較や絶え間のない不満にはきりがないからだ。だから，効率を原動力とする経済成長に限界がない，というのは誤りだろう。現在では，奇妙に思えるかもしれないが，もし私たちがまともに機能する社会を望むのならば，非効率であることが私たちの選択肢になるはずはない。

〔中略〕効率は社会存続には不可欠かもしれないが，結局のところ，効率そのものや効率を組み込んだ経済モデルに，生きる理由という“大きな飢え”の解答を導き出すことができるわけではない。純粋に経済的な領域の外に，もっと多くの活動を創り出す必要があるのだ。そこでは人のやる気と効率とは無関係で，内発的な満足に関連をもつことになろう。そしてそのとき，カネと市場は，人がものごとを考えるときに，あまり重要なことではなくなっているだろう。

私の友人でかなり高齢の人々，つまり私と同年配の者のうち，少なくとも3人がピアノを習いはじめた。ピアノを習うのは，歳をとって指の関節が固くなってくると，とりわけ難しいものだ。また，両手をうまく別々の動きであやつる能力は歳とともに衰えていく。本来の曲のとおりでなく大まかにしか弾けなくても，3人ともそんなときの満足感を実に熱っぽく語る。音楽をただ再現するという観点からすれば，CDを買ってきた方がよほど効率的（エフィシアント）だ。だがCDでは，この人たちの意図にまるでそぐわないだろう。言い換えれば，効果的（エフエクテイウ）でないということだ。

同じことは，多くの英国人がたくさんの時間を費やしている事柄や，私たちが趣味として見くびっていることすべてについて言える。私の家族がよく時間を過ごすあるいなか村の住人はわずか7百人だが，このなかに実に20以上の同好会がある。その内容は，クリケットから，戯曲，刺繍，教会の鐘つきまで実に多様だ。同好会について書いたある本がかつて表現したように，こうした活動は「趣味への熱

意を共通項として形成されている」のだ。こうしたグループ活動には効率性が疑わしいことも多いが，そんなことはほとんど問題ではない。メンバーはむしろ，グループの混乱状態を前向きに楽しんでいることもある。

ここには，別に目新しいことや驚くべきことがあるわけではない。多くの人々(たぶんほとんどの人々といって良いだろう)が，人生の意義や満足を見つけるのは，市場経済外の，効率性とはまったく関係がない活動からなのだ。しかし残念なことに，私たちが私的に行うことは公的な計算には入らないのだ。こうしたことが計算に入れられる方策を見つけていかなければならない。そうしてこそ，私たちが作ってきた神話から逃れることができる。その神話とは，価格のついたことだけが，所有したり実行する値打ちがあるということだ。これが正しくないことを私たちは知っている。それがわかっているということは，すばらしいことだ。

(出典)　チャールズ・ハンディ著，埴岡健一訳『もっといい会社，もっといい人生―新しい資本主義社会のかたち』河出書房新社，1998 年。